



男たちは大変な誤解をしている、と思うことがある。気に入った女と一緒にいる時、相手を楽しませようとして、あまりにもお喋りすぎるのだ。

先日、ある男性と二人きりでお酒を飲んでた時のこと。彼は次から次へと息をつく間もなく喋り続け、それはまるでたつた数秒間の沈黙さえも許さないような勢いだったので、私は半ば呆れて「いつもそんなに話題が豊富な？」と遠回しに避難した。すると彼はこう答えたのだ。「黙っている、あなたに退屈するでしょう？ だって僕は沈黙が嫌いなんだ。やっぱり女性を盛り上げたいじゃない」と。

彼は勘違いしている。学生のコンパならともかく、いい年をした男が、女と二人きりでお酒を飲んでいるという場面で、相手の気持ちに「盛り上げたいのなら、（お喋り）よりも、むしろ（沈黙）を上手に使いこなすべきではないだろうか。

もしも彼が、私にとって遠慮なく何でも話し合える気心の知れた友達だというのなら話は別。ところが彼は、その夜、明らかに私を口説こうとしていた。

今でも鮮やかに心に焼き付いているシーンがある。私と彼は、その時、恋をしていた。まだベッドには行っていないかった。そして、ある夜、二人は数回目のデートをするにたまる。お互いの都合で、その蓮瀬はほんの一時だけと最初から決まっていた。伝えたいことはいっぱいあった。一時間しかないんだもの、とにかくできるだけ話したい、と私は思っていた。

けれども、実際のところ、彼と私は、その一時間で、ほんの二三言しか喋らなかつた。いや、喋れなかつたのだ。時間はあまりにも早く過ぎて行き、何か喋らなければもつたない、という身を切られるような思いに、喉がカラカラになるほどだった。次に会えるのは、おそらく2週間か3週間後だろう、そう思うと、飢餓感ますますつづいていった。それなのに、言葉が出てこない。時折私は、彼の横顔に釘づけになり、彼は数回、私の頭の上に苦しげな、追いつめられた視線を落とす。その眼差しは、何と素敵に彼の情熱を語っていたことだろう！ あなたが好きなのだ、という百万回ほどの告白よりも、あの瞳は、私の心をつつなで満ちた。

本心に恋をした時、大人はしばしば言葉が失ってしまう。そのことを知っている女たちは、決して、沈黙を不愉快なものだとは思わない。むしろ、沈黙の中に、相手の言葉にならない告白を、敏感に感じることが出来るものなのだ。

**マンボカー  
パラダイス**

**マンボバスで九州  
キャバレーツアー**

東京ラテンムードデラックスという私のやっているバンドが、九州は博多・長崎のグランドキャバレーミナミの営業に、東京からメンバー全員が1台のワンボックスカーに乗っていったところまで前回お話ししました。それにしても壮絶な旅でした。

**プロフィール** 1965年生まれ。同志社女子大学卒。(株)電通フロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」「P.O.P.研究所」。「キスマで、待てない」「大和書房」など。

MARUOKA IZUHO

荷物持ってかけ足。凄いやというが、尊敬しちやいます。むかし東京パノラママンボボーイズやっていたときにリリースしたCDアルバム「マンボ天国」は佐川急便のドライバーにえらく評判で、長距離夜間の高速道路では疲れが吹っ飛びます、という内容のお手紙をもらったこともありました。

話がそれましたけれど、とにかく片道千四百キロは辛いですよ。おまけに雨の夜の中国道なんて、真っ暗なうえにカーブにアップダ

